ホテルホタルで

直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ホテルホタルで

【Ｎコード】
Ｎ１１４７ＢＡ

【作者名】
直

【あらすじ】
何もない女子高生と
お金しかない中年男の
ホテルホタルでのお話

1　林　若菜

工場の町。
どこかで鉄を削る音がする。
でもその音はかすかだ。
こんなに工場が並んでいたら、もっと火花が飛んでいたり、鉄がぶつかり合う音がしていてもいいくらいなのに。
小さな町工場には、仕事がおりてこないらしい。
新聞を読まない私には、その原因が何かなんて分からない。
知る気もなければどうにかしようという気持ちもない。
ただ、
仕事が少なくなったうちの工場には莫大な借金があって、それを残してお父さんが消えた、
その事実だけが私の目の前にあるだけだ。

父の工場は小さなねじを作る工場だった。
車のどこかの部品の一部になるという、その小さな小さなねじに、
お父さんは人生を賭けていた、と思う。

「ほんの少しの歪みでも、大きな事故につながるんだ」とお父さんは言っていた。

「お前ももう少し大きくなれば、お父さんの仕事が分かるようになる」とも言っていた。

17歳になった今でも、私はその意味がよく分からない。

とにかく私の目の前には、借金まみれの工場と、毎日ふさぎ込んで過ごす、お母さんしかいないのだ。

2　高橋　忠義

工場と女子高生が好きだ。

まぁ工場の「好き」と女子高生の「好き」は全く種類の違うものだけど。

平たく言えばそうなる。

要するに変態だ。

その二つの「好き」が、今俺の目の前にある。

シャッターの下りた工場の前に立ち、その工場をじっと見つめる女子高生。

紺色のセーラー服に赤いスカーフ。

膝丈のスカートから白いソックスを履いた細い足が伸びている。

背中のあたりまである長い黒髪はストレートで、前髪は眉のところで切りそろえられていた。

今時の女子高生という感じではないが、決してダサい訳でもない。

流行には乗らずに自分らしさを大切にしている。そんな感じだった。

そんな女子高生が通学カバンを抱えて、工場をじっと見ている。

ミスマッチといえばミスマッチだ。

でも、なんとなくこの町工場の景色に彼女が溶け込んでいるような気もした。

この工場の娘なのか？

よく見ると、彼女の目は見つめていると言うより、睨んでいるような、そんな目だった。

その時、フワッと少し強めの風が吹いた。

黒髪をなびかせた彼女の横を、どこからか飛んできた桜の花びらが一枚、通り過ぎていった。

彼女を奪って壊したい。

そんな良からぬ思いが、その瞬間噴火するようにわき上がった。

3　この工場の価値って何ですか

お父さんが帰ってくれば。

お母さんは毎日呪文のように唱えていた。

お父さんが帰ってくれば、きっとまた工場を再開して借金を返していける。

貧乏でも普通に暮らしていける。

お母さんは依存心が強い人だった。

結婚してから専業主婦で、ずっとお父さんに頼って生きてきた。

仕事の発注が少なくなってからはさすがにスーパーのパートに出るようになったけど。

きっとお父さんが私たちを捨ててどこかへ行くはずないと思ってるんだろう。

でも、現実はもっとひどい。

寝て起きるだけでも借金はどんどん膨らんでいくのに、いつ帰って

くるか分からないお父さんを待っていていいの？

こんな工場はやく手放して、少しでも借金を減らしたらいいのに。

お母さんにそれができないのは、ほんとは私がよく分かってる。

お父さんが大事にしていたこの工場を守ることだけが、今のお母さんの生きる目的になってるんだ。

そんなある日、お母さんは私に言った。

「会わせたい人がいるの」

4　会わせたい人がいるの

学校から帰った後、突然そう言われて、制服のままタクシーに乗せられた。

「タクシーなんて、そんなお金ないでしょ！」

冗談めかしてお母さんに言ったけど、お母さんは目を伏せて隣の座席に座っただけだった。

その険しいような悲しいような表情に、これから起こることがいいことじゃないことだけは分かった。

それからタクシーのドアが開くまで、私とお母さんは一言もしゃべらなかった。

着いた先は行ったこともない高級そうな店だった。

これが料亭っていうのかな。

政治家が行く店ってこんなイメージ。

こんな店で会うような知り合いなんていない。

私が会わないといけない人って、一体誰？

仲居さんに通された部屋のふすまの向こうには、知らない男の人が

一人、座っていた。

「はじめまして。若菜さん」

「…」

なぜか声が出なかった。

35、6歳くらいのその人は、太ってもいないしやせてもいなかったけど、小柄で猫みたいな顔をしていた。

小柄なのになんだか威圧感があった。

じっと見られると体が硬直して動かなくなった。

つぎつぎと運ばれてくる料理をお母さんと私とその男と、ほとんど喋らずに口に入れる。

見た目はとてもきれいできっとおいしいんだと思うけど、緊張でちっとも味を感じなかった。

男は時々私に質問してきた。

「好きな食べ物は？」

「学校では何の部活に入ってるの？」

「好きな歌手は？」

そんなたわいもない質問に、私は顔を上げずに答えた。

目と目が合ったら全てを見透かされて、心を支配されそうな気がして。

そんな私の態度にも、男は全く動じなかった。

料理がだいたい出てきて、最後にデザートが運ばれてきたとき、男は再び口を開いた。

「お母さんと話し合って決めました。あなたの家を援助します。あなたの体と引き換えに。」

5　一回5万

「…は？」

一回5万。それが男の出した条件だった。

5万？何それ？…一回って…？どういうこと？

「もちろん、無理にとは言わないよ。君が良ければの話だ」

私がよければ…？なにするの？

あまりにも現実ばなれした話に呆然としていた。

「お母さん…」

助けを求めるようにお母さんの顔を見たらお母さんは泣いていた。

「ごめんね…若菜…でももうこうするしかないの…お父さんの工場を手放さない為には…」

お父さんの工場を手放さない為に…

私のこと、売るんだ。

店を出て、お母さんとは違うタクシーに乗る。男はお母さんと少し話して、私の乗ったタクシーに乗り込んだ。

分かってる。

お母さんはお父さんの工場を捨てられない。

6　ホテルホタル

その男はタダシと名乗った。
本当の名前かは分からないけど、きっと偽名だと思う。
今から私たちがすることは、きっと犯罪だから。

「どこに行くの…？」と聞かなくてもだいたい行き先は分かる。
しばらく黙って乗っていると、予想通り、ホテル街に着いた。
初めて来たネオンの町。ピカピカ光って、品がなくて綺麗だな、と思った。

もうどうでもいいや。
このタダシという男について行こう。
どうなったって、どうでもいい。

並んで歩くと、タダシは思っていたよりも背が低かった。私よりも少し小さい。
地味だけど高そうなグレーのスーツを着ている。
きっと大きな会社の偉い人なんだろう。
でも、そんな人がどうしてこんなことするんだろう。

そんなことを悶々と考えているうちに、タダシの足があるホテルの前で止まった。

ホテルホタル。

センスの悪い名前がネオンで書かれていた。その建物だけが周りの建物よりも薄暗く、古ぼけていた。

タダシがこっちを見て目で合図する。

やっぱりここなんだ。さっきの料亭とはえらい違いだ。

受付のおじいさんはこっちには全く関心ないみたいに、さっさと手続きを済ませて部屋のキーを渡してきた。

「…ねぇ…こんなところに制服で入って大丈夫？あの人が通報したらやばいんじゃない？」

少し心配になって小声で聞いてみた。

「大丈夫だよ。あの人はそういうことしないから。それにこのへんは高校生じゃなくても制服着てる人がいっぱいいるから」

そうは言っても、制服姿の若い女と金持ちそうな中年男が二人でラブホテルに入る画は、どう考えても訳ありだと思う。

階段をのぼってすぐの部屋の鍵を開ける。狭い部屋だった。入るとすぐにお風呂場があって、あとはその先にベッドがあるだけ。

「そこ、座って」

タダシがスーツの上着をハンガーに掛けながらベッドを指差す。

言われるまま座ったら、自分の手足がガタガタ震えてることに気づいた。

7　はじめの一歩

震える足を手で抑える。
体にぎゅっと力を入れた。

私の様子に気づいたタダシは、ニヤニヤしながら隣に座って言った。
「本当にいいの？帰るなら今のうちだよ」
「…このまま帰れない」
もう決めたんだもん。
「そう。…じゃあいいんだね」
タダシが腰に手を回す。髪、顔、肩…と私の体を撫でていく。
胸に触れられると自然に体がビクッとなった。
今日初めて会った男に胸を触られてる…
こんなことになるなんて…
もうパニック状態で、体は思うように動かなかった。
肩を持たれてベッドに倒された。タダシの体が覆い被さって来る。
微かにタバコのにおいがした。タダシの息づかいが耳元で聞こえる。

「若菜…若菜…」

私の太ももを触りながら、何度も私の名前を囁いた。

今すぐ逃げ出したかった。全身に鳥肌が立っている感覚があった。

「若菜…初めてなの？」

小さく頷くしかなかった。はじめてがこの男…頭は真っ白になっていた。

「やさしくしてあげるからね…」

にやっと笑いながらそう言って、タダシの唇が私の唇に近づいてきた。

やっぱりやだ…！

こんな男とキスするなんて…セックスするなんて…

「…いゃっ…！」

とっさに顔を背けた。タダシの体をはねのけて起き上がろうとした。

手首がぐっと押し付けられた。体を起こせない。
男の人の力がこんなに強いとは思っていなかった。
タダシは抵抗する私をむしろ楽しんでいるみたいだった。
ニヤニヤ笑って私の手首をつかんでいる腕に力を込めた。
「今さら嫌なんて言っても、もう遅いよ。
欲しいんだろ、金…」
金…カネ…

「お前も不幸だな…金で娘を売るような母親をもって」

違う…そうじゃない。
つい最近までは私たちは普通の家族だったの。
お父さんがいてお母さんがいて、平凡に暮らしていたの。
お母さんはそれを、取り戻したいだけなんだ。

「一晩目つぶって我慢してれば5万。こんないいバイト他にないよ。
お母さんも助かるよな」
涙が溢れてきた。

悲しいからじゃない。怒りで体が熱くなる。
殺したいくらい憎い。
でも、どうすることもできない。
お金で以前の生活が取り戻せるなら。
欲しいよ、お金。

必死に怒りを抑えて深呼吸する。体の力を抜く。

この男と寝よう。
お母さんのためじゃない。
これは自分の人生を良くするための一歩だ。

タダシはまた、ニヤっと笑った。
「いい子だ…」
そう言って、私の唇にキスをした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1147ba/

ホテルホタルで

2012年1月5日01時50分発行